

～日東協力会創立65周年を記念してインドネシア視察ツアー開催 日東精工グループの価値向上のために 関連子会社、協力会社が ベクトルと呼吸を合わせていく!

日東精工は地方創生をけん引するコネクターループ企業として経済産業省から高く評価されていますが、その評価のひとつが地域の協力企業で構成されている

「協同組合日東協力会（以下日東協力会）」との良好な関係です。

本年5月には、その日東協力会65周年を記念したインドネシアNAI社視察ツアーが開催されました。

このツアーに参加した日東協力会理事長山下信幸さん（サント機工(株)代表取締役会長）と、当社代表取締役社長材木正己との企業価値向上についての対談を特集します。



インドネシア流 「おもてなし」に大感激!

材木正己社長（以下：材木）：今日はインドネシアの現地法人PT. NITTO ALAM INDONESIA（以下NAI社）のブカシ工場をご視察いただきま

したが、いかがでしたか。どんな印象をもたれました？

山下信幸理事長（以下：山下）：皆さんの歓迎ぶりに大感激です。従業員の皆さんが入り口で待っていてくださり、バスから降りてくる我々一人ひとりに「こんにちは」と日本語で声をかけてきて



上左から時計回りに、ブカシ工場エントランスには当社マスコットキャラクターねじとくんが現地語でお出迎え／工場見学前に会議室で挨拶と概要説明のセレモニー／工場視察用帽子に今回のツアー名が刺繍／ブカシ工場を視察する日東協力会の方々／工場内の様子



くださる。工場見学用の帽子もゲスト用の使い回しでなく、今回のツアー名を刺繍で入れていただいて記念品になるようにしていただきました。ほんとうに目配り、気配りが行き届いて……、もはや「おもてなし」は、日本の専売特許じゃありませんね。

材木：ありがとうございます。もちろん、日本のいいところは現地でもどんどん取り入れてもらっていますが、「郷に入れば郷に従え」という言葉があります。人口の約90%がイスラム教の国で、祈りを大事にしているから、工場内にもお祈りができるスペースを設けています。文化とか国民性の違いがありますから、日本はこういう流儀だからという押し付けはいけません。そのあたりをNAI社の久馬武彦社長がバランスを取りながらリーダーシップを発揮し、日本での留学経験も豊富なPRIYA SETIADI（ティディ）取締役が絶妙な調整役を担ってくれています。

山下：このブカシ工場（インドネシア第2工場）は昨年8月から操業を開始したばかり。新しい工場だからということもあるからでしょうか、とて

も明るい印象でした。

お客様ニーズに応えるため スピードアップで新工場を操業

材木：ここは何から何まで新規ということではなく、もともとは日系ねじメーカーの現地法人インドネシア工場を事業譲受したものです。先ほどNAI社の久馬武彦社長が事業概要をご説明しましたが、インドネシア経済は右肩上がりです。当社製品への需要も多い。当社は1985年にインドネシアにNAI社を設立しタンゲラン県に工場を設け操業しているのですが、4年前に比べると売り上げは180%、ここ近年需要と供給のバランスからも生産力アップが喫緊の課題だったわけです。新工場の候補地をいろいろ検討したけれど、いかに早く操業開始ができるか、お客様ニーズに素早く応えられるかも選択基準のひとつでした。それで最終的にこの工業団地内にあるブカシ工場を譲り受けることにしました。

山下：確か2018年2月に譲渡され、その半年後に



ブカシ工場応接室で日東協力理事長会
山下信幸さん(左)と当社代表取締役
社長材木正己

は新工場として操業を開始されています。すごいスピードですね。

材木：土地を購入してイチからスタートということではこうはいかなかったでしょう。自分たちが使いやすいように壁を取り外したり、屋根を増設したり、現地のみんが急ピッチで作業を進めてくれたわけです。もともとあった設備を当社のコーポレートカラーに上塗りしたので、明るくきれいに見えますが、必ずしも新しいものばかりではない……。

山下：いえいえ、先ほど明るいとおっしゃったのはなにも設備面だけでなく、そこにいる人のことでもあるわけで、皆さん、じつにいきいきしておられる……久馬社長にお聞きしたのですが、いわゆる社員旅行や工場の竣工式などにも、従業員だけでなくその家族も皆招待しているそうですね、この一体感、高度成長期の古き良き日本を思い出しますね。モノづくりの基本は人づくりというのは世界共通でしょう。人を育て人間関係がうまくいっているから、ここぞというときに一丸になれます。

材木：ほんとうにそうだと思いますね。最近こそ少なくなりましたが、かつては「日東さんが海外

進出されるのは人件費を安く抑えるためですか？」とよく聞かれました。そうでなく、お客様のニーズに応えるために、よりお客様に近いところにいて細やかに対応するためです。だからこそ従業員の満足度を高め、質を高めないといけない。いま山下理事長が古き良き日本を思い出すとおっしゃったけれど、僕は日本人の社員によく言うんですよ。「君らは自分たちの技術のほうが進んでいると思っているかもしれないけれど、東南アジアの人たちから学べるものがいっぱいあるんだよ」と。

外から学んで 井の中の蛙にならない

山下：昨年の秋にグローバルQC大会を綾部の本社で開催し、台湾、中国、インドネシア、タイ、マレーシアなどの現地法人の代表が一堂に会したのも、そういう背景があるわけでしょう？

材木：いいモノをつくるにはしっかりとした設備投資が必要です。このブカシ工場もごらんいただいたように、さらに新しく建屋を建ててラインを増設する準備中です。生産を一貫化させることで、



四輪車や二輪車ユーザーへの需要対応が15%はアップする予定です。しかし、その一方で、あれが必要、これが必要という声にすべて応えるのは難しい、今あるもの、与えられたもので、いかによりいいモノをつくっていくか、改良していくか、無駄をなくしていくかということも大事なんです。この設備で〈よくぞこれだけのものを仕上げられるな〉という匠の技をもつ職人は海外にもたくさんおられます。

確かに技術面では日本がリードしていて、戦後日本が歩んできた道を後からたどってきているという側面もあるでしょう。でも「初心忘るるべからず」ではないですが、だからこそ、海外からも得られるものがあるのです。

山下：グローバルQC大会後の研修で日東協力会の波多野製作所にもマレーシアの方が研修視察に来られたのですが、通りいっぺんの視察ではなく、熱心に質問をしてメモを取り、ときには研修生同士が現地語で熱く意見を戦わせたりして、その姿勢がとても刺激になったと波多野社長が言っていました。今回の視察ツアーの目的に挙げたひとつでもあります。私ども日東協力会も、井の中の蛙になってはいけません。そしてただ漫然と今ある目の前の仕事をこなしていくのではなく、あるいはヒナが巣の中で親鳥が餌を運んでくるのを待

っているだけではいけないということを肝に銘じていきたいと思っています。

関連会社、協力会社が一丸となりベクトルと呼吸を合わせる

～協同組合「日東協力会」はそもそもどんな会なのかをご説明いただけますでしょうか？

山下：昭和29（1954）年に中小企業組合法に基づいて設立されたもので、日東精工さんの主要外注先21社で構成されました。主な事業は組合員各社のための金融事業ですが、研修会や懇親会も行っています。入れ替わりもありますが、今は18社です。

材木：日東精工が地方創生をけん引する「コネクタ―ハブ企業」のモデルとして経済産業省から高く評価されたことがあります。もともとその地にあった地場産業ではないけれど、本社のある地元にとくさんの協力会社とのいい関係を構築し、その地域の経済に貢献しているということが、評価理由でした。いい関係を構築するというのは片想いでは成り立たないわけです。

日東精工の社史にこんな記述が残っていました。日東協力会20周年のときの当時の取締役工務部長の言葉ですが……〈親企業の苦労をそのまま会員各位に押し付けた時代もあり、資金面においても多大のご迷惑をかけたことなど当時を思いかえして汗顔のいたりであります。会員各位には耐えがたきを耐え、当社とともに苦難の道を歩み続けていただきましたことを今更ながら感謝に堪えないところです〉と発言しております。

とりわけ、山下理事長が会長を務めておられるサント機工さんには、設立当初から組合員になっていただいております。悪い時代もいい時代も常に変わらず当社を支えていただいていることに改めて感謝申し上げます。

山下：いえいえ、こちらこそありがとうございます。いま材木社長がおっしゃった、まさに片想い

では成り立たない関係ですね。日東協力会の入会規則には、たとえば日東精工さんとの取引が全体の何割以上ないといけないといったような数字の縛りはまったくありません。一業種一社でもなく、業種業容が重なっていてもいいわけです。ちょっとオーバーといいますが、気障な言い方をすれば、日東精工さんと価値観を共有できる仲間が協力会の会員（組合員）だと思っています。

言葉を換えれば、単なる親睦団体だけであってはならないわけで、皆がしっかりクオリティを守り、高めていかないとけません。1社でも足を引っ張るようなことがあってはいけません。だから、日東協力会でもQC活動を共有していますし、私も理事長として、煙たがられるとはわかっておりますが、日東協力会各社を定期訪問したりしております（笑）

材木：本当にありがたいお話です。以前、このニュースレターの対談で三菱電機の当時の柵山正樹社長に〈綱引きのたとえ話〉をうかがったことがあります。皆が同じ方向に引っ張らないと綱引きは勝てない。



山下：しかもタイミング（呼吸）を合わさないといけない。それは会社経営も同じだということでしたね。

材木：成長路線もあって新しい関連子会社や海外拠点が増えています。もちろん、ただ拡大すればいいというわけでなく、まさにベクトル&呼吸合わせが大事ですね。日東協力会さんとも、これからもより良い関係が築いていければと思います。今日はありがとうございました。



東南アジア最大のモスク「イスティقلال」の前で視察ツアーに参加された日東協力会のメンバーと随行した当社社員、NAI社員

協同組合「日東協力会」

P1~5の特集でもご紹介していますが「協同組合日東協力会」は昭和29年8月に設立され、
本年65周年を迎えました。現在は下記18社で構成されています。

事業所名	業 種	業 容
(有)飯田製作所	機械金属部分品加工	各種ねじの製造から、検査、選別、包装まで
(有)市野製作所	工具製造	ドライバービット
(株)ウィック	金属製品製造	各種ピン、工業用ファスナーのゆるみ止めねじ、 樹脂成形品、切削加工部品
河内精機(株)	光学機器製造	光学用機器部品製造、産業用省力機製造（設計、部品加工、組立まで）、 精密試作部品、治工具加工など
公栄精密(株)	機械部品加工 省力機械装置等製作	機械部品加工、省力化機械装置等製作から組立まで 小物、小ロット品やアルミニウムの精密加工
(株)サンコード	製缶、精密機械製造	製缶品、機械部品の小物、アルミニウム・ステンレス加工部品一式
サント機工(株)	機械金属加工	繊維機械、歯科医療機器、金属加工から組立完成まで
(株)シオノ鑄工	鑄物製造	繊維機械部品、ポンプ部品、搬送装置部品、水道用弁栓類など
(株)SHOWA	ねじ製造	ワッシャー組込ねじ、特殊形状の転造や線材料からのねじ一貫生産
(株)高倉機械彫刻所	製造、販売	樹脂、金属各種銘板、精密目盛、ネームプレート、各種看板、パネル板、 樹脂板の切削・加工および組立
タマヤ(株)	印刷紙器、ラベル製造	印刷紙器、紙工品、ラベル・シール、段ボールケース、袋など
(株)東豊精工	金属製品製造	線ばね、板ばね、特殊ばね（異線形ばね、マイクロスプリング、長尺ばね） などプレス金型、精密治工具、合理化機器の設計・製作および販売
土橋電業(株)	開発、製造	電気・電子機器の開発、製造、販売 マイコン・パソコン・シーケンサによる各種システム開発、製造、販売など
仲村金属工業(株)	金属表面処理 （電気めっき）	ねじ・座金・ピン製品等のめっき加工
(有)西川産業	金属機械加工	鉄・ステンレス・アルミニウム・銅合金などの切削加工
(株)日昌製作所	一般産業用機械部品加工 ユニット組立	工作機械部品、航空機部品、半導体製造装置部品、省力化機械部品など
(株)波多野製作所	工業用ねじ製造	M2～M5の各種工業用ねじ
(有)舞鶴鉄工所	金属製品加工	普通・ダクタイル鑄鉄製品、鍛造製品、流量計部品、ポンプ部品、産業機 械部品、船舶用部品

当社代表取締役社長材木正己が 地元コミュニティラジオに出演

6月9日、日東精工が本社をおく綾部市のコミュニティラジオ「FMいかる」に当社代表取締役社長材木正己が出演しました。「とれたてワイド763」という番組内でパーソナリティからインタビューされ、今春出版した書籍「絆経営で目指す新しい地方創生」関連を中心に、今春、刷新したロゴマークや働き方改革など多岐にわたるテーマについてお話いたしました。地元の方に当社の事業や理念を伝えるチャンスをいただけたことに感謝し、これからも地元の方へ情報発信に力を入れてまいります。



オンエア前に日東精工本社応接室で録音。右はパーソナリティの三嶋久美さん

インドネシア研修生が地元中学の 「多文化共生」授業に協力

当社ではインドネシアからの研修生をほぼ毎年1年間受け入れ、本年もギオファニアレム ファワズさんとナジュミ サラムさんが技術研修を受けています。ねじや自動車向けパーツを製造するためのヘッダー技術習得がいちばんの目的ですが、日本文化に触れる機会を設け、地元の方々との交流も大事にしています。6月20日に綾部市立豊里中学校に招かれ、自国の魅力や文化を伝える機会を得ることができました。研修生ふたりの励みとなり、中学生にとっては異文化をリアルに体験することになりました。当社、日東精工では今後もこういった社内研修プログラムを地域貢献と連携させていきます。



写真上が研修生のギオファニアレム ファワズさん、下がナジュミ サラムさん。

夏休みを利用して子どもたちに「ねじ」の大切さをアピール そして、今年も図書館に児童書を寄贈しました

当社では社会貢献（CSR）活動の一環として、これから未来を創造する子どもたちの育成に力を注いでいます。とくに本年は若手社員を中心に夏休み向けの企画を充実させました。

「夏休み2019宿題・自由研究 大作戦!」（7月24日～25日）は、(一社)日本能率協会主催で今年度は「京都・みやこめっせ」で開催されたものです。また7月31日～8月3日には東京ビッグサイトで「第6回プレス板金フォーミング展MF-Tokyo 2019」が開催。この展示会には(一社)日本ねじ工業協会が出展され、同協会の「子どもたちの自由研究に役立つねじをテーマとした体験学習の場を用意したい」というご意向に当社が全面協力したものです。



この2つの展示会で「ねじの作り方」「ねじの種類」「ねじの機能」が楽しく学べるコーナーを設け、体験学習で完成させたねじやねじを楽しく学べる「宿題用冊子」を参加者全員にプレゼントしました。

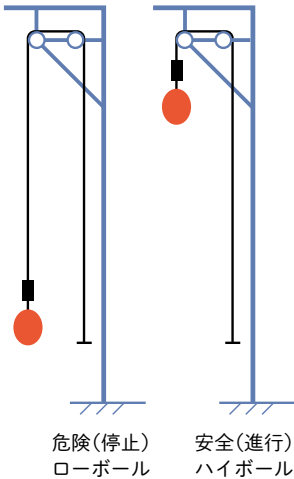
また、当社出版の書籍『人生の「ねじ」を巻く77の教え』（ポプラ社）の印税をもとに、2015年から毎年綾部市図書館に児童書・教育書を寄贈してきましたが、本年はこれに当社材木正己著『絆経営で目指す新しい地方創生』（扶桑社）の増刷印税も加える形で実施。7月20日、綾部市図書館にて寄贈式が行われ、綾部市の足立雅和教育長にご出席いただきました。





本質的安全設計と「ハイボール」

ボール信号機
(BALL SIGNAL)



ウ イスキーのソーダ割り
がなぜ「ハイボール」
と呼ばれるのかをご存じで
しょうか？

「ハイボール」という飲み物の語源は、じつは鉄道に於けるボール信号機です。今は鉄道の信号機は電気式ですが、かつてイギリスではボール信号機(BALL SIGNAL)が使われていたそうです。駅構内に設置され、駅員がボールを上げたとき(「ハイボール」時)は、構内は安全なので侵入して良いという合図となり、これを見て列車が入線してきたのです。古き良きのみびりした時代。乗客は駅の待合室でウイスキーをちびちびやりながら列車を待っている。と

ころがボールが上って「ハイボール」になると、列車が入ってくるのでホームに急がなければなりません。残ったウイスキーを一気にあけるのは身体に良くないので、そばにあったソーダで割ってグーッと飲んでホームへ急いだ……。これが、ウイスキーのソーダ割り「ハイボール」と呼ばれるようになった由来です。ハイボールは安全の合図だったのです。

「安全」には(1)本質的安全設計によるリスクの低減(2)安全防護によるリスクの低減(3)使用上の情報によるリスクの低減があります。ハイボールの信号機は、もし駅員に問題が生じたり、紐が切れた

りの不具合があれば、ボールは上がらず、あるいは落下して安全信号は出ません。故障は必ず「安全側故障」となり、列車は入線せず危険にはならないです。単純ではあるけれど最上位の「本質的安全設計」といえるわけです。

日東精工のフアスナー(工業用ねじ)は車や家電製品、精密機器、住宅機器、医療、などいろいろなところで使われ、皆様の暮らしをサポートしています。そ

連載 20

あやべ ちょっと寄り道

星空観測に最適 天文館パオ

日東精工が本社をおく綾部市は平成3年・4年に環境庁が行った「全国星空継続観察(スターウォッチング・ネットワーク)」で、全国10位以内にランキングされたことがあります。雨や曇りの日も少なくはないのですが、晴れた日には美しい星空を見ることができる街です。そして、一般の人が自由に観測できる公開天文台は全国に約120あるのですが、綾部・里町ある天文館「パオ」には95cm反射望遠鏡があり、これは国内でも最大級だそうです。月はもちろん、惑星から銀河まで観測でき、体験教室やモノづくり教室、コンサートなどの多彩な内容のイベントも開催されています。夏の夜空観測のおすすめスポット！



6月28日に「綾部防犯協会」の総会が開催され、新会長に私、材木正己が選任されました。日東精工本社のある京都府綾部市の、地域の安全安心にもこれまで以上に真摯に取り組んでまいります

れだけに当然のことですが、常に、もちろんこれからも多面的に安全を意識・考慮してまいります。